

# 一 錢 銅 貨 水 代 美 色 代

「あら伯母さんだ、何時来たの？私些少も知らなかつてよ。」

裏縁の障子を開けるなり、筒抜けた聲を掛けて入つて来たのは、此家の總領の袖子で、本當の歳はまだやつと數へ歳の十一なのだが、身柄が馬鹿に大きくて、知らないものはどうしたつて十四五には見る。ぶり／＼する程發育し切つて、まるで男のやうな體格で、首がすくんで見える程肩が怒つてゐる。おまけに色のさめためりんすの被布の、肩行の短いのを着せられて、肥つた脚を裾からニョキツと出し、頸と顔と面を被つたやうに日に焼けて、口の兩側に出来た鳥のお灸一つ、眞白くつばをためた様子は、餘り可愛らしい方ではない。だが一體の肌理は細かいし、眉は濃いし、黒腫勝ちの濕ひのある眼元で、娘になつたら案外美人になるかも知れない。

「あ、お袖ちゃんかい、御苦勞様。だがもう學校がひける時分かねえ。」

と小一時間も前から話し込んで居る伯母は、直ぐ横手の柱に掛つた時計を見上げるやうにした。非常に働きの、氣のせわしない人で、恩給となにがしかの遺産で、母一人、娘一人くらゐ、立派に何不自由なくやつて行ける、陸軍大尉の未亡人でありながら、始終空手を持つのが嫌ひで、一年が年中毎晩のやうに一時二時まで、内職のおはりて夜を更かす。色は白いが、チョッピリ鼻で、客色の好い此家の細君と實の姉妹とは思はれぬ。

「お、嫌だ！今日は日曜日ぢやないの、いやな伯母さん。」

「左様だつたね。伯母さんは此頃如何したと云ふのか、馬鹿に忘れなくなつちやつてね、始終芳に笑はれてばつかり居るんだよ。」

「矢張りいそがしい故爲ですよ。私だつてそりや忘れつぽくなつて、自分で可笑しくなりますの。」

細君は火鉢のいきりて赤く上氣した顔を撫て、此時初めて袖子の方を見やつたが。

「アレまあ此兒は、何だらう、汚いぢやないかそんな足して、彼方へ歩いて！」とさも汚なさうに顔をしがめた。

「うそ！いま其處の雑巾で、ちやんと拭いて来たんですもの、土なんぞ、ちつとだつて着いてやしませんからね、へん、うそなら御覽なさいだ！」

いきなり伯母と母との鼻先さへ突出した足を見ると、踵は垢で黒光りに光つては居るが、本當に土だけに着いて居なかつた。

「およしつたら、伯母さんに失禮ぢやないか、つねるよ。」

「知らない！負けたもんだから、へんだ。」

「ねえお袖ちゃん、今度も湯で母さんによく洗つてお貰ひ、足の裏が眞黒だよ。」

「え、だつてもね伯母さん、家の母さんたら、そりや甚いのよ、些少も私なんか洗つて呉れやしな

いんですもの、自分ばかりクラブだの御園だの随分つかつて、本當どる洒落の癖に甚いの。」

「アレまあ此兒は、何だらう、御覽なさい、あんな憎い口を利くんですよ。」

「お袖ちゃんも洗はせないんだねえ。」

「うそよ伯母さん、私奇麗になるの大好きですもの、洗つてさへ呉れりや黙つて幾らでも洗はせるわ、芳ちゃんにだつて聞いて御覽なさいよ。」

「左様かい。」

「ねえつたら伯母さん、私芳ちゃん大好きさ、お湯につれていくと、屹度私にも白粉塗つて呉れるんですもの、今日何故一緒に來なかつたの、え、伯母さん？」

「芳ちゃんはね、音樂會があるつて來れなかつたの。」

「學校？」

「いえ上野。」

「アラ芳ちゃんたら甚いわ、私も一緒につれてつて呉れれば好いのに。」

「だつて今日の音樂會はね、小供は駄目なんだとさ。」

「そいだつて芳ちゃんだつて、まだ大人ぢやないぢやないの。」

「芳は好いんだとさ。」

「何故？え伯母さん。」

「うるさいねえ、彼方へ歩いてつたら。」

母は又眉根をしがめて見せた。二十九で五人子持ただといふのに、平常から兎角小供をうるさがる。

奇麗に髪を丸髷に取りあげて、襦袢の半襟も紅入りのなんぞ掛けて居る。

「好いやねまあ、お前のやうにそんなにうるさがつたつて仕方がない。」

袖子は長火鉢の傍へ寄つて來て、そこいらの茶道具なんぞ見廻して居たが、モジモジした様子で、伯母の顔を見い／＼した。

「さあ一つ。」

伯母が菓子鉢から鹿の子としぐれと、二つはさんで呉れるのを、嬉しさうに貰つて、

「どうも御馳走さま！」云ふより早く、むしやむしやと食べ初めた。

「何て御行儀なの！本當に家の子はお行儀が悪くつて。」

「何家だつて小供は皆なだよ、だが氣をつけていやしくないやうにしつけないとね。」

「さう思つてるんですけ共ね、袖だけはもう、本當に私困るんですの。」

「母さん、もう一つ！」

「もう食べたの、早いね、伯母さんに笑はれるぢやないか、そんな事云ふんぢやないの、好い兒だから彼方へ行つてお遊び。」

「いやだ、もう一つてば。」

「先刻伯母さんに貰つたぢやないの。」

「あんな、たつた二つ位！ようてば母さん。」

「いけません。」

母は取り合つて居られないと云つた風に、わざとそつ方を向いて見せると、

「ぢや一錢頂戴。」

「如何するの？」

と今度は伯母が訊く。

「アラ嫌だ、何か買ふんぢやありませんか、解つてる癖に、好いわ。」

「お錢なんぞ持つて、お袖ちやんは裏店の子のやうだね。」

「だから餅菓子頂戴つて云ふんだわ、それさへよこせばお錢なんぞいらないわ。」

「當り前ぢやないか。」

「だから今一つてば。」

「そんな事云へば尙やれないよ。」

「ぢや一錢！」

「うるさいつたら、本當に此兒は仕方がない、姉さん、私此兒がこんなだから全く情けなくつて、どうしたら好いんでせうねえ。」

「さうさね、お袖ちやん、母さんが心配だつて云つてるから、全くおよしよ。」

「そんな、そんな心配する位なら、たつた一つだ、呉れたつて好いぢやないの、よこしさいすりや、私だつてねだりやしなさい。」

「あんな憎らしい、姉さん、まあ聞いて頂戴な、どうてせうまあ、本當に困つてしまふ。」

「だからよこせば好いんだつてばさ、解らない母さんだよ本當に。」

袖子は段々母のからだに寄りすがつて、どうしたつて呉れる迄は動かないと云つた様子だ。伯母は呆れてたゞ見て居る。

「ようてばよう、一つてば、母さんのけちん坊、けちん坊、けちん坊、だから父さんに嫌はれるんだわ 咲やだつて左様云つてた。」

「打つよ！」

「打つたつて好いわ、一つ打つたらそれだけ餘計ねだつてやるから、母さんが損するばかりだ！」

「本當に如何したと云ふ見だらう！」

「ようてば母さん、母さんのけちん坊、呉れなけりや大きな聲で、母さんのけちん坊つてどなつてやる、え、母さんてば、それでも好い事？」

「好いよ、何とでもお云ひ！」

「母さんのけ——」

袖子は思ひ切り大きな聲で怒鳴りかゝつた。そして母と伯母の顔色を見比べて居る。

「あやしつたら、サ、これをあげるから彼方へ歩いて！」

今の今まで強硬な態度をとつて居た母は、急に折れて、菓子鉢から大福をはさんで渡した。

「いや、こんなもの、私鹿の子が好いんだつてば！」

「だつてこれつきやないんだもの、これ嫌ならあよし。」

「ぢやこれでもよくつてよ。」

勝ちほこつた袖子を、伯母も母も憎々しさうにらめた。

「又俊ちゃんや貞ちゃんが歸つて來るとするさいから、お前彼方へ行つて遊んどいてよ。」

「あ。」

もう用はないと云つた風で、袖子は次ぎの間へと出て行つた。

「驚ろいた兒だね、芳がよく、お袖ちゃん此頃中々さかなくなつたつて云つてたけれど、まさかあんなだらうとは思はなかつたね。」

「だから私困りますの。」

「お前が又おしまひにお負けだからいけないんだよ。」

「だつてうるさいんですもの。」

伯母はいつそはがいつたらしく思つたが、

「春樹さんに叱つて貰ふんだね。」

「え、てすけれども、良人ぢや彼の通り子供なんか構ひつけない方ですから、私一人が氣揉むんですの。」

「だけ共今の内どうかしないと、とても駄目だよ、お錢なんぞ幾らねだらたつて決して持たしちやいけない、良人なんぞ本當に厳しかつたから子供に些少もいやしいところはなかつたがね、よく春樹さんの氣象で黙つて見てると思つて、全く不思議だよ。」

「それがね良人の前ぢやあんなでもないんですもの。」

「だから告げて叱つて貰ふんだつてば、左様でもしなげや、お袖ちゃんはとても母さんの手におへる兒ぢやないんだから。」

「今から私をこんなに馬鹿にしてるんですものね、いまに芳ちゃんのやうに女學校へてもあがるやうになつたら、まあどうせう、私それを考へると恐くなりますの。」

「うつかり育てちや駄目だよ本當に、芳なんぞも此節さかなくなつた事つたらないからねえ。」

「矢張り父さんがない故爲てすねえ。」

勝氣な伯母は一寸といやな顔をした。

「人様から後家育ちなんて後指をさされないやうに、一生懸命さびしくしてるんだけれどもね、矢張り私が意氣地がないから、つい駄目になつて了ふんだよ。」

「姉さんなんかしつかりして、そんなこともないんだけど、子供の教育つて中々むづかしいものね。」

「さうとも、お互に餘程氣をつけないぢや。」

「あ、あ、もうよしませう、考へると私氣がクシヤクシヤして堪りませんわ、それよりかねえ、先刻の話ね、本多さんの口つてのは如何なの？」

「芳の縁談かい？」

「えい。」

「月給もかなりだしね、それに會社だから年二季の賞與を入れると、悪くない話なんだがね、どうも私氣が進まないのよ。」

「何故？」

「良人で軍人だつて故爲か、どうも桐田さんの口が好いやうな氣がしてね。」

「桐田さんの口つてのは少尉でせう。」

「少尉だつても前、まだ學校を出たばかりだもの、段々昇進して行くわね。」

「そりやさうだけでも、それで芳ちゃんは何云よの？」

「芳はまだ小供だもの。」

「それでも芳ちゃんのお婿さんですもの、一應相談して見た方が好いてせう。」

「それがね、音楽家が好いなんでいつてるんだから——。」

「アレまあ音楽家とは又——。」

「自分が音楽が好きなんだから、只無暗とそんなことも云ふんだらうがね、音楽家でなきあ一生結婚しないんだとさ。」

「オヤオヤ妙ねえ芳ちゃんも。」

「何も解りやしないんだよ、私が幾ら云つても聞かうとしないんだもの、春樹さんに話して貰つたら好いかと思つて、實はその相談に来たんだがね、芳は春樹さんの云ふことなら何でもさくやうだから。」

「さうね、良人で丁度留置にしていけないけど、歸つて来たら今晚にも話して見ませう。」

「あ、どうぞね。」

「何しろ早く好いお婿さんがめつかることよござんすのね。良人でも左様云つて、紋付の一重位祝ふなんて、芳ちゃんと約束してましたつけ。」

「さうだつてね、芳がそんなこと云つたよ。まあ、何しろ早くお婿さんをさがして、安心しないぢや。」

「どうですわ、これでお婿さんさへ定れや姉さんも大安心だ。」

「又婿で苦勞するかも知れないがね。」

「え、誰のお婿さん？ 芳ちゃんのもの？」

「次ぎの間から突然袖子がこゑを掛けた。」

「あゝびつくりした！ お前をこて聞いてたの？」

「ねえ母さんでは、芳ちゃんのお婿さん軍人さんなの？」

「あゝまだ解らないんだよ。」

「だつて少尉だつて話してたぢやないの、ねえ伯母さん、私軍人さん大好きさ、目の大きい、色の黒い、鼻の高い、ね、村田さんの小父さんみたいなの、軍人さんのお嫁になりたいわ。」

「ほゝ、此間から頻りに村田さんくつて、お婿さんの話さへ出りや、さう云つてるんですよ、可笑しな兒ねえ。」

「さうかい、お袖ちゃんは何故そんなに、村田さんの小父さんが好きなんだらう、餘程好い男だと思つてるらしいね。」

「だつても私、あの小父さんたら随分親切なんですもの、そりやあいろんなもの買つて呉れてよ、リボンの何だの。」

「それで好きなのかい、ほゝ、」

「うそ、そればかりぢやないわ。」

「ぢや何故？」

「だつても私、何だか、云へやしないわ。」と妙な嬌態をして、小父さんたらね、私、惚れたんだつて、

何日かの晩泊つて来たてせう、あの時は、私をいろ／＼戯弄ふのよ、私本當に極りが悪かつたわ。」

「まさか！」

伯母も母も思はず顔を見合せたが、伯母の胸には此時あることが、電のやうにきらめいた。それは市ヶ谷八幡のお祭の時、此處の上の方の姉弟三人が、八幡町の祖母さんの家へ招ばれて行つて、泊ることになつたが、他の親類からの來客もあり、店はやつて居る、せまくるしくつて、ごたつくと云ふので、麴町の親類へ小供等をわけて泊らせた。村田は伯母の良人の血續きて、若い頃には可成り放蕩もしたけれど、今ではもう四十へ手の届かうと云ふ曹長から仕上げた歩兵少尉だ。袖子は伯母と一緒に其處へ行つたが、伯母は祖母を手傳はねばならんと云つて、袖子の面倒を頼むと、直ぐ引返して歸つて行つた。其翌日八幡町の家へ袖子が歸つたときには、村田の小父さんから買つて貰つたと云つて、リボンだの花かんざしだの、いろ／＼なものを持つて居た。

「云ふんぢやないよ父さんに、ねえ、お袖ちゃん、好い兒だから黙つといでよ、可いかい、屹度だよ。」

伯母は自分の縁家だけに尙と氣を揉んだ。

「何故？云ふと叱れるの？え伯母さん！」

「さうともね！父さんに聞かさうともんなら、それこそ大變だ、ね、屹度も云ひでない。」

「あゝ云はない、恐いから。」

「本當でせうか」

「まさかとは思ふけどもね、此様なことが假りにも春樹さんの耳に入るといけなから、お前出來るだ

け氣をつけて居て、秘密にしなさいけないよ、お前は何でもうつかり饒舌つちやう方だけれど。」

「えゝ大丈夫ですよ——だけれどもまさかねえうそでせう。」

「だけどもさ、春樹さんは一體に氣むつかしやだからさ。」

「伯母さん、私に一錢呉れないことほうづき買ふんだからさあ。」

「アレまあ此兒は、又そんな事云ひ出すの？いけないつてば！」

「だつて私、ねえ伯母さんてば！」

「仕様がなね、そいぢやまあ伯母さんがあげようねえ、其代りお袖ちゃん、今のこと屹度父さんに内證だよ。」

「えゝ大丈夫、解つてゐるてばよ。」

伯母は懐から紙入れを出して、袖子の手に一錢銅貨を握らせた。

——完——